
とある約束を胸に・・・・・

ルー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある約束を胸に・・・・

【Zコード】

Z55590

【作者名】

ルー

【あらすじ】

元少年と最強の能力者の二人が、とある事件の真相を追いかける。

ボーイ・ミーツ・ボーイ??
いやボーイ・ミーツ・ガールだ!!

一章・プロローグ（前書き）

はじめまして、ルーと申します。
一話を書いていたら急にプロローグを書きたくなって
急遽、書いたので少し
いやかなり言葉がおかしいです
では、馴文をどうぞ

一章・プロローグ

ここは、魔法使いがいて異能者がいて、科学者がいる世界。この世界には、科学に対抗するために異能が生まれ、異能に対抗するために魔法が生まれ、魔法に対抗するために科学が発展している。

そんな世界に、ある男がいた・・・・

その男は、寂しそうな雰囲気をだし、墓地の前でただ立っている。「待つてくれ

男の口から洩れた言葉は、すぐさまかき消える。

「お前を生き返らせて見せる。」

今度は、かききえないぐらいいのしつかりと意思がこもった言葉・・・

男は、その言葉を吐くと駐車場に置いてあるバイクにまたがる。そのバイクの名前はGSX1300R・・・HAYABUSAと呼ばれるものだ。

『遅かつたですね？もつ、対象に接触していますよ？』

メットにつけられた通信機から漏れる声を無視し、男は鍵を回しエンジンを始動させる。

四気筒の重いエンジン音と、体を震え上がらせるような鼓動が男を包む。

「さあ、行こう。」

男の姿は、マフラーから奏でられる音とともに、どこかに消えてしまった。

男の消えた方向を墓地はただ、見つめていた。

とある街で、少年が追いかけられている。

追っているのはフードを被った異能者。

少年の顔は、まるで少女のように可憐で、体は少女のように小柄

だつた。

そんな少年が、追いかけられている。

それを見ていた人がいたら、まちがいなく通報していただろう。

ただし、見えていたらの話だが・・・・・

「クソ・・・・・」

少女のような少年から、そんな言葉が漏れた。

異能者の能力が、少年の体を貫く。

少年の体に、何か不思議な感覚が広がつていき、少年は路上に倒れこむ。

異能者は、目標を達成したといわんばかりにその場を立ち去つた。

瞬間、バイクの甲高い叫び声がその場にどづく。

「お前だな？」

ハヤブサに乗つて現れた男は、バイクのメット「」に異能者をにらんだ。

「ふん」

異能者が鼻を鳴らし、消失する。

メットをはずした男の顔は、憎しみにみち溢れてい。

『対象の保護は？』

男は急いで、少年の域を確認する。

「息をしていない、俺の力で息は吹き返させる」

男はメットを放り投げて、倒れている少年のそばに座る。

「汝に祝福を」

少年の顔に、男の手がおかれる。

その手がまばゆく輝き、徐々に光を失つていく

次に少年の姿が光に包まれた。

「あれ？」

それは男にとつて予想外のことだつたのか、素つ頓狂な声を上げ

る。

「まつ、いつか」

光が止んだ時、少年の姿はもう一回つ小さくなり胸は膨らんでいた・・・

「あ～、よくないわな～」

男はそっぽやきながら、メットをつかむ。

「あ～俺だ。ちょっと面倒なことになつた。上に取り合ってくれるか？」

男は少女を抱え、どこかに消えていく。

一台のバイクを残して・・・

一章・プロローグ（後書き）

前書きで言いたいことを書いてしまったあ~~~~~

第一話 …& quot; - ; & quot; - (前書き)

さてと一話です。

自分でも納得いきません・・・・・・・・

だったら書くなよって話ですよよねえ(遠ご用)

第一話・"；？"；

田覚めると、体に違和感を感じる。

胸のあたりが重いのだ。

俺は寝ぼけているだけだらうと、胸のあたりに手を置いた。すると、ポヨンとした感触が手に伝わる。

男としては触つたらうれしい感触だが、男の胸を触つて帰つてはいけない感触だつた。

俺は恐る恐る胸元を覗き込むと、二つの大きなふくらみが見える。まさかと思い、てを恐る恐る下の方に持つていこうとした瞬間、何者かの気配を室内から感じた。

ふと見ると、微妙な顔をしながら一人の男が立つていて。「あ～なんだ？ その～見なかつたことにするから、どうぞ続けていいよ？」

男は窓から、立ち去ろうとする。

俺は冷や汗をかきながら、男の肩をつかむ。

「マテや、『リ』

そのまま引き寄せると、俺が大勢を崩してしまい、男のマウントポジションをとる形になつた。

「なんかエロいな」

そういうと、男は何をするわけでもなく表情も変えずに立ち上がる。

「初めてまして、植村 京君？」

俺は自分の名前を呼ばれ、少しどキッとする。

「俺は異能者機関『エンジエル』所属、篠崎 元といつ」

男は自己紹介をすると、勝手にイスに腰掛けた。

パチンという音が鳴る。

「君の身に降りかかつた出来事を、簡単に説明しても？」

俺はうなずく、そりや朝起きていきなり女に性転換していたら驚

くわ

「君には特殊な能力があつてね、それを快く思わない連中に殺されたんだ」

男は淡々と、物事を喋る。

「俺に来た依頼は、君を護ることだから君の体にあるものを埋め込ませてもらつた。」

俺はだんだんと、嫌な予感がしてくる。

「どうも、それが君の本質を変えてしまつたみたいでね？その、女体化はそれの一部だと思つ」

やつぱりかよ・・・・

「戸籍とか、今後のことにもこちらに任せてくれると助かる。できるだけ、君を元の性別に戻してあげたいしね？」

俺はふと、埋め込んだから変質したんなら・・・・と思つ

「ああ、埋め込んだものは摘出してあるよ？俺は、本部に用事があるから、そろそろおないとまさせさせていただく」

男は窓から飛び降りると、下に置いてあつたバイクにまたがり、どこかに走り去つてしまつた。

俺は仕方がなく、ロンティーを着てジーパンをはく。

女体化の影響か、心なしか尻が出てきているような気がする。しかも、裾も袖もだらだらだなあ

俺はため息をつくと、朝食を食べようと下に降りていく父と母の談笑が聞こえてきた。

「では、むす・・・・めのことを、よろしくお願ひします。」「任せてください」

「あら、頼もしいわね」

あれ？何か居たよな？

「ところで、君は能力者とこいつことだけビア？」

「ええ、ネクロ・・・」

俺の居間への侵入によつて、会話は終わる

「やあ」

「さっき帰りましたよね？元さん」

元は首をかしげる

「俺の『Hンジエル』内でのあだなは、『やばに偏在する混沌』だからなあ」

元は少し間をおく

「京、君にはとある学園に来てもらひ」

元はカバンから、資料を出す

「五聖院地外都市？」

俺はそのパンフレットを読み、驚いた。

「聞いたことがあるだろ？『Hンジエル』をはじめ『魔法協会』、『研究所』の三大勢力で、運営されているんだけど」

話には聞いたことがある。

科学、魔法、異能が集まって仲良くしておいたり田の上に造られた、実験都市のようなものだと

「あれ？ テロは起きないのか？」

俺がそう聞くと、元は笑いはじめる

「起きると思うけど、護衛がつくしね」

五聖院はその成り立ち上、魔法、異能、科学のなれ合いを嫌う連中から攻撃を受ける。

まあなれ合いを嫌う連中が、隔たり関係なく集まっているから、本末転倒といつてもいいだろ？

「護衛？」

「うんそう、『Hンジエル』からね？ それとこれ、うちのオペレーターのオペ子から

そういうと、元は紙袋とかをとりだす。

「オペ子が男の娘でも、抵抗なく着れる服を用意したそうだ」

俺は服かよと覗き込む。

うん、ブライジャーはいいとしてこの四角い機械はなんだ？

俺はそれをとりだすと、机の上に置く

『ども、オペレーターのHMIと申します』

いきなり、女性の声が聞こえて来て俺は驚く

『うちのバカのせいで、こんな結果になってしまったで申し訳ございませんでした。』

「だれがバカだ。誰が」

『貴方以外どこにいるというのです?』

俺は、俺の身に起きたことなど構わずに、吹き出してしまって
『服のことと、生活のことに関しては、私がバックアップします。
あと、そこのバカの対処法もね?』

「あ、ありがとうございます」

一人、むくれていてるやつがいるが・・・

「さてと、コビキタス・フリー」

元が一人に分裂する。

「分身をおいて行くから、何かあつたらそいつに頼んでくれ・・・

俺は行くところがある」

そういうと、片方の元はどこかに消え去った。

第一話・"・?"・(後書き)

キャラが独り歩きしない導入話なので書きつい一応3話あたりまでは導入編が続きます

第一話・データの妖精（前書き）

お久しぶりです

来週に学園編始まります

つまりは導入編が今回で終わります

ひやつほ～キャラを自由に動かせるぜ

第一話・データの妖精

とあるビルの地下に造られた核シェルター、そこに元は足を踏み入れていた。

こつこつこつと俺の足音が真っ暗なシェルターに響く、シェルターには巨大なサーバーがあるがどうしてか起動しているはずなのに起動音がして いない。

「やあ、元。君が来るなんて珍しいね？」

奥にいるのであろう、シェルターの主が声をかけてくる。

「ところで、男の娘つていいよね？」

すべてしつっているのかよ。

俺はため息をつき、あきらめる。

「ああソースはちゃんと『エンジール』から知ったよ? ここに来ることとは、何か人に言えない仕事かな?」

俺はあきれ果てて、ポケットからUSBメモリを取り出し放り投げる。

「調べてほしい物のリストだ。あと、お前に別で頼みたいことがある。」

奥からは何も聞こえない

俺は心配になるが、一瞬だけキーボードをたたく音が聞こえる。

「前者は調べておく、後者の内容は?」

「お前も知っている通り、我らが姫様の護衛だ。」

俺は少し目を細める。

「それは、『エンジール』としての依頼かな? それとも……君の復讐のお手伝いかな?」

流石に、こいつには嘘はつけないか……

「データの妖精、俺は復讐の手伝いとして依頼している」

数秒がたち、妖精は楽しむように笑う

「いいよ……君の復讐相手は僕でも、調べきれないからね? 調べ

きれないものには興味がある」

さてと、これでようやく物語が始まられる・・・

「そうそう、犯人との対決には呼んでね？君の全力が見れそうだし」
元は軽く苦笑いする。

「そうそう、お姫様・・・彼女に似ているね？君が守れずに、死な
せてしまつた友人の恋人に。君も、好きだつたんだつけ？彼女のこ
とを」

つち・・・いやなことまで知つてゐるのかよ・・・

Side 京

「さあいくぞ、はよいくぞ」

「準備できたよね？答えは聞いてない」

なぜかW元に絡まる俺（女性歴数日）がいる。

「――「行こうぜ」」

元達が・・・？

あれ？増えてね？

「元レッド」

「元グリーン」

「元イエロー」

「元ピンク」

「――「四人そろつて、ハジメンジャーナー」」

いつのまにか四人に増えていた・・・何このカオス空間？

「ステレオで叫ぶなうつとうしい、全部同じ声だからきもいんだよ。

俺はため息をつきながら、荷物をまとめる。

正直、服などは使えないで向こうさんが用意してくれるらしい
が、隣にいるそのメンバーの一人を見ていると、非常に不安になつ
てくる。

「心配しなくても、大丈夫さ 服はオペ子が選んだから」

一人になつてデフォルメ化されている元がいた。

「それは魔法なのか？能力なのか？つうか人の心読むなよ
元は悪戯をする子供のような顔になり笑う

「神法だつたりしてね？この世界には、神と呼ばれるものたちがいるし」

え？なにそれ、普通の人間そんなこと知らないよね？
て言うか、宗教関連で神はいなかつたつてことにされなかつたつ
け？それに反発した人々が、テロリストとして祭り上げられて今追
われているのは何なの？

それだと、神様が自分を慕つてくれている人間を見捨てているつ
てことにならないか？

「う～ん、今の主神はいろいろとおかしいからね？で、人に対して
一番フレンドリーなのは死神だよ？」

「皮肉だな」

「だと思うよ。死を嫌う俺たちのことを一番よくわかつてくれてい
るのが、死神なんだからね？」

つか話の流れから、俺は神の力を使つていますってことか？
いきなり後ろの扉が開いて、中から元が出てくる
「さてと、覚悟はできたかい？」

そういうと、元は凶悪な顔で笑う

「できたなら、表に停まつてる軽トラに乗つてくれ
そういうと、元は俺のまとめた荷物を持ち上げる。
その腕力はまるで、人外のものだつた。

side 京

なぜだろう・・・

トラックの助手席に入ろうとした時、元が座つていた。

「なに驚いてんの？」

元がニヤニヤしながら笑つている。

「お前は一体、何人いるんだ？」

「俺は一人だよ？あ、ちなみにこれ本体ね。」

俺は分身にいじられていたのかよ・・・・・少し、自己嫌悪しながらうつむいていると、ゆうくつとトライックが進み始める。

「おい・・・免許持つていてるのか?」

「ああ、それね。俺は今年で19だ。同じ年と思つた?」

同性でも引きつけそうな、元の笑顔を見ながら俺の引っ越し始まる。

決して、惹かれたのは俺が女の体になつたからじゃないはずだ。たぶん・・・・・・

第一話・データの妖精（後書き）

まあね・・・。いうことないんですけど
バイクで事故りました。
病室にLANあるつていいよね？

第二話・元の思惑（前書き）

お久しぶりです。
二か月も行方不明となりすみませんでした。
さて、短く駄文ですが
どうぞ。

第二話・元の思惑

俺は鼻歌交じりに、トラックを運転する。

「やけに楽しそうだな」

隣には、黒いつややかな髪を持った彼女と同じ存在がいる。

「いやあエンジン付いていたら、どんな乗りものでも楽しいよ。」

実際は、車よりバイクのほうが好きなのだが。

B - K - I - N - Gとか隼とかZZRとかNINJAとか・・・・。最初に乗ったバイクは、ゼルビスだけなあ、懐かしい。

「へえ、乗つたことないから解らんけど、そんなものなのかな?」

「ああこの任務が終わったら、俺・・・・船舶免許取るんだ。」

「死亡」フラグも回避しておいて・・・・と

「いろいろと待て。」

俺は首をかしげる。

「お前いくつ、免許持っているんだ。」

「MT普通車、MT大型二輪（と自家用操縦士ボソ）だけかな?」

「いやいやいや、今ほそつとなんて言つた?」

その反応あいしいです、アウアウアウ。

「その言葉をいろいろな人から聞くためだけに、100時間以上のフライトに耐えたといつても過言ではないさ。」

最初は、才能がないのかつてぐらい危なかつたしなあ。

バイクの時はすんなりいったのに・・・・

【注：こんな馬鹿な考へで免許をとると、後で後悔します。】

「何という無駄な努力。」

無駄つて言つくなよ俺の努力の結晶を。

「お、もうそろそろ着くぜ?」

大きくて無機質な壁が見え始める。

「五聖院地外都市へようこそ、京?」

驚く目でその壁を見る京をよそに俺はそつそつぶやく。

ゲートの前で車を止めると、警備員が「ひりに向かってくわ。

「ID：と所属団体名を述べてください」

「ID：0984621 所属は『エンジエル』だ。」

「しばらくお待ち下さい。」

俺は確認の間暇になる。

「すごい徹底してるね？」

そう京が言ったので、俺は苦笑いをする。

「そうでもないよ？ 外部からIDを追加したり、魔法で幻覚見せたり、能力で精神を操作できたりするから。」

「確認が取れました。『わざに遍在する混沌』様ですね？ そちらの方は？」

俺は、彼女の学生証を懐から出すと、警備員に渡す。

「五聖院の入学者だ。特定の団体にはまだ入っていないので、IDなどは持ち合わせていない。」

警備員はその場で学生証をスキヤーニングすると、こりこり返してきた。

「了解しました。ようこそ五聖院地外都市へ。」

俺はそのままトラックを走らせる。

「そういえば、おまえって超能力者だったよな？ どんな能力なんだ？」

俺はその問いに、答えずらいなあと思いながら

「一応は、『ネクロマンシー』ってなってるけど『シャーマン』に近い特性を持つていてるなあ」「どういうことだ？」

「ん~、靈を憑依させて能力を借りる能力なんだけど、死体に靈を憑依させることが可能だから、皮肉つてそう呼ばれているんだ。実際は、能力を借りそして覚える能力だけど。

「常識つてものを知っているか？」
「常識つてものを知っているか？」
ひでえ言いようだなあおい。

ちなみにこの特異な能力おかしな点があつて・・・

「魔法も使えます。」「

「おい、までこいら。」「

女の子がそんな汚い言葉を使ってはいけません。

「能力者は魔法と相性が悪くなる。つうか発動しなくななるって常識知っているか?」

「知つてはいるが、俺には関係ない。」「

俺はブレークを踏み、車を停める。

「ここが俺の小さい家だ。」「

約30人が共同生活が送れるぐらいの広さの家だけど……何と広大な庭つき

「豪邸じゃねえか!」「

ツツコハありがとひ、さて搬入作業だ。

あいつは大量の分身をつくり、俺の少ない荷物を運びこんでいく。

「おや、もう到着なされましたか」

いかにも執事というような、初老の老人が現れた。

「ああただいま。京、彼はこの家に仕えてくれている人の一人で宮田といひ。」「

ちょっととまで、さつきの自家用操縦士にも文句言いたいけど、執事がいるつてことはこいつまさか……

「もしかして、おぼつかちゃん?」

「いや、一般庶民だけどねえ。まあこの仕事していると、いろいろあるのね。」「

いやいや、何その怖い仕事。

「んじや、俺は戻ってきたから、支部にあいつさつ行ってくる。宮田、頼んだぞ?」

「わかりました。スーツは?」「

「いらん」「

元は本当に何を考えているんだろうね?」「

「えつと、俺の部屋は……」「

「「こちらになります。」

俺は屋敷の中を案内されながら歩いていく。

「「こちらになります。」

俺は宮田さんに頭を下げ、室内に入る。

室内は、可愛らしいものなど一切なくベッドとタンス俺の持つてきたものが並べられているだけだった。

大方、HIMIさんが裏で手をまわしたのだろう、元にやらすヒゲンク色の何とも形容しがたい甘ったるい空間ができそうだな。

「ふむ・・・・・」

服のほうも、おとなしめで安心した、これでフリルのふんだんについた可愛らしいもの着せられた日にや、首をくくれル自信がある。俺はドスンと、ベットに倒れ込む・・・・・

「はあ～、なんでこんなことになつたんだ？」

「やつほ～い、HIMI～」

近代的建物の、事務室にいるHIMIに声をかける。

「どのような御用件でしょうか？『そばに遍在する混沌』様

「またまた、他人行儀な・・・・怒つている？」

HIMIの容姿はブロンドかかつた髪に猫のよつなアーモンドの目の少女だ。

可愛いと形容できるその容姿が今は、すこし恐怖に感じる。

「あの～HIMIさん？怒つてる？」

「怒つていないとでも？」この数日の規則違反、無断欠勤に挙句の果てには、護衛対象を危険にさらす行為・・・・これで怒つていないとでも？」

アハハハ・・・・なーんもいい返せないね（笑）

「それで？説教受けにきたわけではないんでしょ？」

俺はうなづく。

「そろそろ、学生に戻ろつかなと、手続きしに来た。」

「そういえば、まだ高校生でしたものね？」

「ちいちとげのある言ひ方、どうにかならんのか」こいつは・・・
「護衛任務としておけば・・・」

俺は少しため息を吐く。

「頼むよ。訳は・・・今晚、俺の家に来てくれないか?そこで話す。」

「解ったわよ。」

俺は書類を提出し、軽く欠伸をする。

「しかし、能力者の中で最強とも歌われている貴方が仕事を停止させるなんてね?」

苦笑いをすると、出されたコーヒーを飲む。

「なんかさ、今の貴方ちょっと危ういよ?まるで、姉さんを・・・

「そうでもないぞ?」

確かに、無理している感があるが、そのために休みを取ると言えば取るのだ。

「今を楽しみながら、生きてるよ。」

約束を守るために、なんだつてするけどね?

おかしいわね?

どこにどう侵入しても、彼の記述があり得ないことになつていてる。

「それに」

『エンジエル』、『魔法協会』、『研究所』のTOPが全員行方不明という点も気になる。

彼はこのことを知つて、私に調べるように依頼してきたのかしら? だとしたら、彼の周りで起きる出来事はとても愉しそうなものになりそうだ。

「データフォルダ元」

音声認識で、一種類のデータがあらわれる。

そのひとつには、こう書かれている。

魔道協会、Sランク魔法使い『東雲 元』と・・・

第二話・元の思惑（後書き）

主人公（元）のほうのスペックがおかしい件・・・
どうしてこうなったし・・・
ちなみに私は自家用操縦士は持つておりませんので、ツッコミはボ
ケで受け流します（キリ

第四話・新しい日常

俺は昨日帰つてきて誰かと飲み明かしていた汚物を、白い皿で見る。

汚物は、途中で潰れたのか、何故かソファーで眠つていたが。「おきるー元」

汚物は少し体をよじらせ。

「後、5時間30分28秒・・・・」

ただの睡眠じゃねえか、しかも秒数まで指定しているし。

俺はいらっしゃつとして腹に一撃を入れようとした瞬間、汚物はその場から消えていた。

「甘い、それは残像だ。」

「・・・・朝から疲れるわあ・・・・」

「元さまが憑いている。やつたね?」

「何その悪夢?」

「ん、制服渡していなかつたな、ほれ。」

俺は箱とまだ未開封のブラウス、だつたかそんなものをうけとる。

「これ・・・・着るの?」

「あたぼうよ、スリーサイズを寝ているブルまあ

俺が殴ると、奇妙な声を上げながら元がとんでもといった

「・・・・」

「反応がない・・・・死んだか?」

「うーん、とつさの反応がブルマとかありえねえよ。」

隣に、苦笑を浮かべている元がいた。

「I still have lots more to work on.」

英語でなんか言つてるし・・・・しかもやたらうまいのが腹が立つ。

「とりあえず、男としての京は死んだことになきゃいけないから

る。可哀想だと思つが、我慢してくれ。」

その言葉には、さつきまでのようなふざけは入つていなくて、ただ優しさだけが入つっていた。

少し、ドキつとしてしまつた自分に自己嫌悪。

「あと、アドバイスなんだけど精神つていつのは体に依存するんだ。

」

つまり?

「自分をしつかり持たなきや、精神まで女になるだ?」

俺は地面に手をつきうなだれる。

「そんなに嬉しがるなよ。」「

うれしかね~よ。

学校につくと、元はどこかに消えてしまつた。

そして俺は自己紹介という、果てしなくかつたるい作業を終わらせて、指定された自分の席に座る。

普通、転入生の隣は空席はないはずなのだけど・・・

「転入生のほかに、復学する人もいます。入つてきて」「入つてきたのは、あの汚物だつた。

「「「きや~」「」「

な・・・なんだ?一気に女性陣が騒ぎ出したぞ?

「名前は・・・皆さん知つてそうですね?」

キラリという擬音が似合ひそつた笑顔を元が浮かべると、また女性陣が騒ぎ始める。

「年は・・・仕事をしていた関係上年上ですが、気にせず話しかけてくださいね?」「

誰だこいつは?

朝のふざけていた馬鹿はどこ行つた?

チヨーンジ、チヨーンジ。

「あ、京さんもこのクラスだつたんですね?よかつた。」「

ちょ・・・おま・・・

それをここで言つと、女性陣の嫉妬が・・・
ほら来たよ・・・大丈夫かな？俺の胃持つかな？
ちらりと見ると、汚物のさわやかな笑顔の中に、どす黒い笑顔が
見えた。

・・・確信犯かよ。

昼休みになり、隣ですうすう寝ている汚物をまるで汚らしいもの
を見るかのような目で、見る。

「こいつは常時寝ていたけど、大丈夫なのだろうか？」

「京さん、一緒に学食に行きませんか？」

ナルシスト・・・という言葉が似合いそうな男が近づいてくる。

「えっと、貴方は？」

「失礼、僕は「ナルシス 太郎だ」・・・違つからね？」

やつと目が覚めたのか、のつそりと元が起きてきた。

「兄さん？食事に誘う邪魔はしないでくれるかな？」

あれ？今なんか聞き捨てならんことをナルシス 太郎がいつたな
あ？

「ああ、こいつは・・・俺の幼馴染の相沢 隆弘つていう名のナル
シストだ。」

幼馴染かあ、安心した。

こいつの血族がさらに増えるとなると、どんな心労を被るのか、
解つたもんじやないからな。

「ナルシストは固定なのか？兄さん。」

元はハツハツハと笑っていた。

ナルシストってここは俺も同意だ。

「ひどいなあ」

「さあて、太郎は置いておいて、飯食いに行くか。」

あ、太郎はやっぱり固定なんだ。

さあて、太郎と京をひきつれて、鬼退治（食堂の席取り）だ。

「キヤー 元様よ。」

「元様、こちらの席をお使いください。
という具合に、なんなく席を get。」

「すごい人気だな？お前。」

「流石、兄さんです」

いや流石の意味がわからん。

「つうかなんでこんなに人気なんだ？顔ばれもしてるし
「あそれなら、これだとおもう。」

太郎は何故か持っている鞄から、一冊の本を出す。
「五聖院で一番強いのはだれか？つておい」

何々？この五聖院の中で一番強いと言つたら、『エンジエル』の
『そばに遍在する混沌』こと『篠崎 元』氏である。

彼は能力者でもありながら・・・・・つておいなんだこれ。
なんで、TOPクラスの秘匿事項が乗つてんだよ。

大丈夫か？『エンジエル』とその他の諜報部。
僕の情報も載つていて、うちの諜報部に問い合わせたら情報がを

持つてきたのは、美少女だつたつてことしかわからなかつた。
謎の美少女・・・各機関の諜報部を出しぬけるほどの実力ねえ。
・・・

一人しか思いつかん。

「なあ、隆弘。うちのつて言つてたけど、所属は『エンジエル』じ
やないのか？」

「あれ？京ちゃんにまだ言つてなかつたつけ？俺は魔法使いだよ？」

「童貞乙」

俺はすかさず、そういう。

「黙れ『W i z a r d』」

oh、太郎の怒ガチ切れしたでござれる。

「え？え？」

混乱している京を俺は、笑いながら見る。

「さつき、この汚物のこと、兄さんって呼んでたのはなぜ？」

おーい、本音が漏れてるぞ~

つうか、心の中でそんなこと思つていたのか……

少し、OHANASIが必要だな。

「ああ俺は昔『魔法協会』にいたんだよ。その時に、100以上の教育係しててなあ。」

「その時に、年が近かつたから兄さんと呼ぶようになったわけだ。ちらつてみると、京は居心地の悪そうにしてて。」

「そりいえば、京って姉さんに似てない?」

ボソつと呟いた太郎を俺はにらむ。

「は・・・じ・・め?」

おつといけない、殺氣をダダ漏れにしちまったか。

京はこういうのなれていなからなあ~

「兄さん、まだあの時のこと……」

俺はどうだらなあといいながら、物思いにふける。

帰ろううと思ふと、下駄箱に何か入つててることに気づく。

ラブレター?とおもつたが、いまどきなんて古風なと思つ。

しかも、今は女性なのに、その手紙は女子特有の丸文字で描かれていた。

「ん?」

そつこに書かれていた言葉は……

『貴方みたいなのが、元様のそばにいることは、私たちが認めませんわ。』云々

嫉妬?でもなあ~

そう思つていると、元が天井からぶら下がつていた。

「何やつてんだ?」

「「コウモリ」」(キリ)

めっちゃいい笑顔で言い切つたよこいつ、本当に大丈夫か?

「までまで、スルーしていくな。」

俺が何も言わざ歩き始めると、しゅたつといつ音とおともに、そ

んな言葉が飛んでくる。

さつきまで宙吊り状態だつたよな?
なんで足で着地しているんだ?

「ゲーセン行くどお~」

「なに、このいきなりな展開いいいいい」

俺の叫びもむなしく、ゲーセンに連れて行かれた。
「すごいな。」

『研究所』の支部もあるせいもあってか、五聖院のゲーセンはや
バいことになつていた。

「お勧めは、体感型格ゲーだな。」

何その不吉な名前・・・

「殴る蹴る、能力、魔法、機械が反映されて、攻撃に変換できるん
だ。ちなみにダメージ食らうと実際の1／10ぐらいのダメージが
降りかかる。」

「え、やだ何それ怖い。」

「流石に、機械に関しては似せて作った専用のコニットがあるけど
な?貸し出しは自由だ。」

「お~つとここでチャンプの登場だあああ

格ゲーに実況がついているのか?」

「「「おおおおおおお」」」

しかもあんなにギャラリーがたくさん。

「信じるは、おのれの肉体と機械のみ。負け知らずの鬼神『チャン
プ』」「『

「あ~あいつは確か・・・」

知つているのか、元は顎に手を当てている。

「すまん。次、彼に挑戦したい。アバター名?『Wizzard』だ。

「にやりと笑う元の顔は、出合つた時よりも凶悪で・・・

「ああこいつを肩に乗せてみ。」

ポンと元の手のひらに一頭身の元が現れた。

「なんだ?」これ?」

「ＳＤ俺だ。お前への攻撃に対して、そいつは等身大となりお前を守る。んじゃ行つてくる。」

もう能力者つてなんでもありなんだね?」

「お~つと、ここでチャンプに新しい挑戦者だ~。」

「「「おおおおおお」」

この歓声が妙に懐かしい。

「身の程知らずな挑戦者『Wizard』その名の通り、魔法使いなのがあ~?」

俺のアバターはスピード重視の小型ファイタータイプ。

攻撃力とスピードは極端に高いが防御、魔法力が極端に低い。

チャンプのアバタータイプは普通。

スピード、攻撃力、防御がやや高めで、魔法力がない。

ちなみにステータスの平均は、どのアバターでも一緒だつたりする。

「おおつとこれは意外だ、チャレンジジャーは小型ファイターだ~」
その言葉と同時に、チャンプのアバターが動く。

「おつと?」

俺はそれを反射神経だけでよけた。

「ただものじゃないみたいね?」

先ほどの戦いをちらりと見て、こいつは高速戦闘型だと思つていたのだが・・・間合いの取り方も熟知している。

「つうかいつからこのゲーム、声出せるようになつたし。」

「話していく大丈夫かい?」

俺は相手のこぶしを受け止める。

「さつさと本気出せよ。退屈しのぎになりやしねえ」

その言葉に、ショットガンがはなたれる。

通常のショットガンの球はよけきれないが・・・

俺の身体能力を1~30ぐらい反映してくれることなら、よけ

切れる。

一瞬にして、視界が灰色になり音が聞こえなくなる。

「なー?」

正面から突撃してきて、よけ切ることを想定していなかったのだから。

通常は範囲外に飛んでよけるものだからなあ。

【通常の人間はそもそもよけれません。】

「驚くなよ? チャンプ。魔法使いと、能力者はこれぐらい普通にやつてくるぞ?」

「おもしろい」

チャンプが、『じ』からともなく取り出したマッチを投げると、マチが大爆発した。

「そのマッチを分子レベルで解析、変化させる機械か……変化の能力を機械で再現したものといったほうがいいか……つちやつかいな。」

「この力の意味をわかるのか?」

俺のアバターは答えもせずに……消えた。

そして……

「勝つたあああ、勝利したのは『wizard』まるで魔法のよくな攻撃は、彼にはきかなかつたあああ」

ふうと俺はため息をつき、相手のほうに近寄つていいく。

「流石だよ『wizard』。」

「そつちこそ。」

そこにいたのは、青い髪を持ち赤い濁つた眼をした少女だった。噂には聞いていたけど、ここまで濁つていたなんてな。

「貴方はまさか。」

「ここで言つなよ? 関係者がわんさかいるから面倒なことになる。喫茶店でもどうだい?」

「ナンパかい?」

挑発的な笑顔。

ふむ・・・なかなか、悪くない。

「残念ながら、連れがいるからナンパってわけじゃがない。」

俺はやれやれといった調子で、両腕を上げ首を横に振る。

「それは残念。でも、貴方のよつないい男の連れっていうのも興味あるわね。いいわ、付き合つたげる。」

「いい女に、いい男と呼ばれるのは光榮だ。」「何やってんだよ。」

終わつてから人込みをかき分け来たのか、京がジト目で俺を見ている。

「「ん~いい女いい男」」。「」

俺と彼女の声がぴつたりと合つ。う~ん最高。

私はさつきのやり取りを思い出し、冷汗をかいていた。

なぜなら、彼のあの芝居がかつた口調も何か考えている風な目もすべて何も企んでいないことを隠すためのものだつたからだ。

「ここも変わらないな。」

「来たことが？」

彼は紅茶をすすりながら、少し微笑む。

「ああ、『エンドジユル』の施設があるところに小さいが、家を持つていてね？二年前まで住んでいた。」

「どこが小さいんだよアレが。」

彼女の口調に少し違和感を感じる。

「彼女は男なのかい？」

「男っぽい口調の女と思つていてくれ。」

「ほう、初めて彼が焦りを見せた？」

「よほど、知られたくないようなことなのだろうか？」

「とりあえず、敵に回るといつのなら、俺は最善の方法をとらなくちゃいけなくなるけど？」

違つた。

知られたほうが、彼にとつておもしろい状況になるといつだけのことだつたようだ。

さしづめ今は、彼にとつて望ましくない状態なように思える。

「まああんまり深読みするな。あんた……も味気ないなあ」

応自己紹介でもしどとか、学生の篠崎 元。こつちは植村 京。」

「私は……西嶋 愛音。『研究所』に所属しているわ。」

彼の唐突な自己紹介に焦りながら、名乗つた。

「驚いた。『研究所』きつての天才と知り合えるなんてね？」

「貴方こそ、『エンジエル』に所属しているんじゃないの？」

彼はとつさに、何か企んだようだ。

急にまじめな顔つきになる。

「ちょっと野暮用で休業していくね？」

「野暮用？」

私はそれに乗ることにする。

「学生をやるという仕事をおうそかにしていたわけ……あれ？」

「一人とも何故ずつこけてんだ？」

そりやずつこけるわよと愚痴りそうになるが、必死に飲み込んだ。

「彼、少し面白いね？ 京。」

「嫌、ただ疲れるだけだから。」

ふふふ、と私は笑う本当にこの人は何を考えているのだろうか？ 実に興味深い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5559o/>

とある約束を胸に・・・・

2011年2月20日09時55分発行